
付属資料 1

フランスの商業系グランドゼコル 入学準備課程での学修について

レア・ゴー（HEC4 年次、一橋大学商学研究科）

1 理科系志願者向けの学修プログラム

私の在籍した理科系志願者向けの準備課程は、理科系バカロレア取得者だけが入学できるコースです。だから、主要教科は数学になります。この準備課程への入学選抜は、高校の最終学年で行われますが、選考は、直近の2学年（高1・2）に関する書類（成績、教員の評価）に基づいてなされます。理科系志願者向け準備課程の理想的学生像は、勤勉で良くできる学生というものですが、高校での勉強でもう精一杯でといったタイプではなく、広い範囲に興味関心を抱き、人文学的領域とも自然科学的領域とも気楽につきあえるような学生です。

もちろん、準備課程のレベルはまちまちで、一方で、超有名高校の生徒から上澄みの優等生しか受け入れないところがあるかと思えば、もっと多様な学生を集めているところもあります。

理科系志願者向け準備課程では、数学が週9時間、アルゴリズム応用実習が2時間、地理歴史経済が6時間、一般教養6時間、第1外国語3時間、第2外国語3時間が教授されますが、これに、多種のコール Khôlles とその準備授業時間数（数学週1時間、地歴、外国語、一般教養はそれぞれ2週間で1時間ずつ）を付け加えなければなりません。このコールというシステムは、フランスのグランドゼコル準備課程に独特のもので、その強みのひとつになっています。内容は、当該科目の教員（学生の担当教員とは別の教員であることが多い）を前にして20分間、口頭でプレゼンテーションを行うというもの。この訓練の目的は、学生たちが講義で吸収した知見を全体的な視野のなかに置く作業を行っているかどうかを確認すること、さらに、限られた時間内にプレゼンテーションの準備をする能力を開発することにあります。

準備課程の教員は、50人規模の1クラスにつき、科目毎に担当教員がひとり配置されます。多くの場合、教員間の連絡は密で、個々の学生の人格や能力を間近で把握することが可能です。各科目の成績（宿題、教場での課題も加味されることが多い）を基礎として、学生の平均点が

算出され、各学期末に席次が公表されます。また、個々の学生に対して通信簿が手渡されます。(通信簿の記載はたとえば次のようなものです。学生某はイタリア語学習に意欲を欠き、よってまったく進歩が見られない、とか、学生某の数学の成績は優秀であるが、全身全霊を込めてはいないように見える、など。)ところで、この通信簿は、教員団および2名のクラス代表を構成員として每学期開催されるクラス評議会によって作成されます。クラス評議会は、教員にとっては、クラス全体のレベル、個々の学生のレベルについて議論する良い機会となりますし、また、学生にとっては、自分たちの要望や不安を教員たちに示すチャンスでもあります。学生の要望は、たとえば、コールの実施方法、科目の教授法、あるいは、他の学生たちの態度に関するものなどです。

学生は、学校での授業とコールと同時に、家庭での復習、指定書物の読解、宿題をこなさなければなりません。したがって、1日あたりの勉強時間は、個々の学生の忍耐度と教員の要求レベルによって変化はあるものの、最低でも12時間は必要だとされています。しかし、15時間、16時間、さらにはそれ以上勉強するケースもまれではありません。

2 一般教養

理科系志願者用準備課程における一般教養科目は、前記の通り、週6時間教授されます。これは、文学的要素と哲学的要素からできている科目ですが、いわゆる文学や哲学の講義と完全に重なるものではありません。この授業科目の目的は、グランドゼコルの入学選抜で課される、テキスト縮約・総合の試験、および一般教養論文作成の試験準備です。したがって、実際の教授内容は、文の統辞論から、文学史、哲学テキストや美術作品の分析研究、現代的テーマに関する考察など、多岐にわたるものとなります。グランドゼコル入試で課される一般教養論文は、フランス式論文(ディセルタシオン)作成モデルに大きく依拠しています。たとえば、「芸術の意味とは何か」という出題だったとしますと、まず、この主題のどこに問題があるかを発見し、そして、これに関する論述を3つの部分(正・反・合)からなる形に仕上げ、さらに、しっかりした構造を持つ序と結論を付ける、という手続きを踏まなければなりません。論文問題は、受験生に問題発見能力があるか、ひとつの主題について、クラスで学んだ、あるいは本人に教養として蓄えられている、文学、哲学、芸術の典拠に依りつつ考察を深められるか、さらに、その考察を、明晰で誤りのない正確なフランス語で展開できるか、を見るものです。試験時間は4時間。

テキストの縮約・総合の試験においては、数千語にのぼるテキストを400語に要約しなけ

ればなりません。受験生は、単なる言い換えではなく、原著者の考察が展開される道筋や、原テキストの趣旨、場合によっては文体をも尊重しながら作業を進める必要があります。試験時間は3時間です。

一般教養という科目によって涵養されるのは、厳密、簡明、迅速であろうとする能力であり、ひとつの主題について熟考し、そこに潜む問題を発見する能力です。と同時に、この科目は端的に言えば、社会、文学、哲学に対して心を開く契機を与えるものであり、自己形成過程にある学生が将来、複雑な問題に出会った時、それらと向き合えるようにするための理論的基礎、そして知的な枠組を構築させるものです。私が通った準備課程のある教員の言葉を借りれば、「教養とはより良く生きることを可能にするもの」ということになります。

準備課程の2年次には、フランスの商業系グランドゼコル入学準備課程全体で、ひとつの主題が設定されます。これは、グランドゼコルの入試の主題として予告されるもので、1年かけて、その準備がなされるわけです。この主題は、たとえば、「正義」、あるいは「情熱」といったものであり、実際の入試では、この主題に関する問題が出題されるのです。〔訳注：たとえば、「絶対的正義は存在するか」など。〕

3 一般教養とのつきあい方

上記のフランス式準備課程システムに対する主要な批判のひとつに、教育科目の有益性を問うものがあります。地理歴史経済や一般教養なんて、進学する商業系グランドゼコルで教えられている実学系科目とは、直接の、あるいは明確な関連がないではないか、というわけです。たしかに、アフリカの植民地分割の詳細とか、カントの道徳に関する思索が、ロンドンのシティーのトレーダーの日常業務に直接の関わりを持つなどということはあまりなさそうです。しかし、そもそも、直接の有益性が準備課程の勉学の目的を構成しているわけではないのです。むしろ、深く考え、かつ持続的に知的作業を行うことができるよう訓練し支援すること、「思考する存在」として知的な自己形成を行えるよう導くこと、これこそが準備課程の目的なのです。10年後の専門的職業の大部分は、現時点ではまだ出現していない、という常套的な言明がありますけれども、こうした急激な変化が常時進行している状況に立ち向かうにあたって、学生たちにどのような備えをさせればよいかを考えた場合、しっかりした推論能力、現代社会に完全に同化し明日の社会を想像するために必要な適応能力や柔軟性を与える以上の策があるでしょうか。もうすこし具体的に言うのであれば、誰でも、ましてや、大企業で枢要のポジションを占めている者ならなおさらのこと、倫理的道徳的なジレンマに直面する蓋然性は高いわけで

すが、一般教養や推論能力がなければ、いったいどこに、こうした問題に正面から対処するツールを見いだすことができるのでしょうか。

現在、フランスのグランドゼコルの組織編成を国際的なレベルでもっとわかりやすいものにするために、入学準備課程のありようが問題になっており、その存続については私自身は悲観的でありますけれども、かりに、準備課程が消滅してしまうにせよ、だからといって、ほかの大学教育システムには欠落している、この基幹的教育が不要になったのだと考えるのは誤りです。専門化が進めば進むほど、われわれの思考が精緻になる、というわけではありません。準備課程という高等教育の有効性を測定するに際して、その恩恵を受けた者たちの喜びを尺度としてほしいのではありますけれども、それができないというなら、せめて、かれらがどのような未来社会を想像することができるのか、を尺度として評価してもらいたいものです。

(佐野泰雄 訳)